

神楽の囃子が鳴っていた。太鼓の響きは黒い杉林を震わせた。
手平鉦の音像はカチカチと火花を打って、笛の音は高く澄んだ声とな
って空へ昇った。

ダダスコダダスコ ダンダンダン ダダスコダダスコ ダンダンダン
ダンダンダン ダンダンダン

ダダスコダダスコ ダンダンダン ダダスコダダスコ ダンダンダン
ダンダンダン ダンダンダン

舞の力強い足の踏み、しなやかに翻る羽のような扇の軌跡、風を切る
太刀の軋り。

蓉子が初めて岩手県遠野市を訪れ、神楽という芸能を知ったのは昨
年の秋のことだった。都内の大学に通う蓉子は、ゼミで柳田國男の
『遠野物語』を読んでからというもの、不思議な伝承を持つ遠野のこ
とが頭から離れず、居ても立ってもいられなくて思い切ってこの土地

に足を運んだのだった。

それはちょうど九月の日曜日の秋晴れの美しい日で、町はずれの神社では祭が行われていた。鮮やかな朱塗りの鳥居をくぐり、古びた石段を上がって本殿へ向かうと、道の左手の小さな神楽殿で神楽が奉納されていた。

円を描いて舞台を廻る鶏舞や弓矢をつがえて舞う八幡舞、赤い面をつけた猿田彦の舞や美しい着物を纏った天女の舞、獅子頭を用いて祈祷を行う権現舞など、様々な舞が鮮やかに繰り広げられる光景に蓉子は心を奪われた。

天女を舞っていたのは二十歳くらいの青年だった。彼は祭りのたびに遠野に戻っては地元の袖山集落に伝わる神楽を舞っていた。今回も数日前に遠野へ帰り、稽古をつけて舞を披露したのだった。

終演後、舞を終えて神楽殿の後ろから出てきた青年は桐の紋のついた着物を着て先ほどの天女の面を抱え、額には汗が光っていた。

蓉子は勇気を出して話しかけた。

「先ほどの天女の舞、素晴らしかったです。今回初めて神楽を観たのですが、こんなに素晴らしい舞を今まで観たことはありません。」
緊張のせいで少し声が裏返った。

青年は驚いた様子だったが、すぐさま向き直って礼を言った。

「ありがとうございます。自分はまだ天女をやって一年目で、まだまだです…」

青年の黒い瞳は高原の空のように澄んだ光を湛えていた。

それから青年は、彼が伝承している神楽は早池峰神楽の岳流という流派だということ、遠野市にはこのような神楽の保存会が町ごと村ごとにあつて、祭りのたびに神楽を奉納すること、かつて神楽は女人禁制だったが女性も神楽を舞うようになってきたことなど、様々に話して聞かせてくれた。

蓉子は固唾を飲んでそれらの話を聞いていた。自分が日々都市の喧騒に埋もれ、憂鬱な毎日を寝起きするのと同じひと時に、遠野では土地の人たちによって大切に守られて芸能が生きづいていくということを目の当たりにして、胸が高鳴った。

「でも、最近はどこも過疎化がすすんで芸能の担い手が少なくなっただ。」

青年は少し顔を曇らせて言った。

「もし神楽に興味があったら、来年の祭りの時は自分の保存会に遊びに来てける。」

蓉子は、はっとした。地域の人たちが誇りを持って守ってきた文化に蓉子のようなよその土地から来た人間が関わることはそう簡単なことではないことは分かっていた。神楽の保存会を見学させてもらうなど夢にも思っていなかった。

青年は名前を拓人といった。

こうして話をしているうちに、蓉子は来年の九月もまた祭りの前に遠野を訪れ、拓人が所属する神楽保存会の練習を見学させてもらうことになった。

それからあつという間に一年が過ぎ、次の年の九月になると、蓉子は約束の通り新幹線と釜石線を乗り継いで遠野へと向かった。

遠野駅に着くと、拓人は軽トラックで迎えにきていた。

「蓉子さん、久しぶりですね！」

拓人は大きく手を振った。蓉子も思わず笑顔になって手を振りかえした。

蓉子は拓人のトラックの助手席に座った。トラックの椅子は背もたれが垂直で座り心地が悪かったけれど、久しぶりに遠野に来られたこと、拓人に会えたことが嬉しくて心がはずんだ。

トラックは曲がりくねった山道をびゅんびゅんとぼした。昼間の日差しは山の斜面をななめに降りて、果樹園の林檎はうっとり日を浴びて艶やかに熟れていた。窓を開け放つと森の香りが舞い込んで、思わず外へ顔を出したくなった。空へせりあがるような坂を登ると、青く鏡のようになって流れる川の脇の道を下って小さな民宿に着いた。拓人は、駐車場に車をとめると、蓉子のスーツケースを荷台から降ろしてくれた。そして、神楽の練習の前にまた迎えに来るからと言って運転席に乗り込むと、ハンドルを勢いよく回し、軽く手を振って来た道に戻って行ってしまった。

蓉子はどきどきしながら民宿の門の前に立った。門には木製のプレートがかけられ、「民宿たかぎ」と手書きの文字で書かれていた。小さなしま模様の猫がミャオと鳴いて身体をくねらせながら蓉子のふくらはぎに戯れた。

「すみません、今日から宿泊の予約をしている須崎と申します。」扉の奥に向かって呼ぶと、家の奥から物音がして、優しそうな中年の女性がガラガラと引き戸を開けて顔を出した。

「あら、いらっしやい。お待ちしていましたよ。須崎さんですね。高

本です。どうぞ、お入りください。」

民宿の高本さんは目を三日月のように細くしてにっこりと微笑んだ。

家はかなり古いつくりのようで、廊下の梁は雪の重みでわずかにたゆんでいた。奥の客室に通されスーツケースを置いて荷物を片付けてしまおうと、蓉子は畳の真ん中に大の字に寝転んだ。

畳に寝転ぶのはいつぶりだろう。

イグサの良い香りがした。まぶたを閉じると、眼裏には先ほど宿まで送ってくれた拓人のすがすがしい笑顔が浮かんだ。あの素朴な感じのする青年がまるで本物の天女のように美しく巧みな舞を舞うのだというところが何だか信じられなかった。

蓉子は起き上がると、民宿の門から道に出た。道脇には青々と大豆畑が広がり、連なった山の末に空がひらけている。刈られる前の田の上空には、アキアカネが羽をキラキラさせながら渦を巻いて飛んでいた。

何だか、ひろびろと心をあげ渡したくなるような空だった。風は秋の日差しに暖められて柔らかく、心にほかほかと雪が溶けるような気がした。

宿に戻ると、高本さんは縁側のテーブルに座って、蓉子のためにお茶を淹れてお菓子を出してくれた。「あけがらす」という菓子は胡桃と胡麻の風味のほんのりとした甘さが上品でとても美味しかった。聞けば、遠野の名産のお菓子なのだという。

縁側から入ってくる光がカーテンを透かして高本さんの額に揺れていた。

「蓉子ちゃん、神楽をやるんでしょう。前に拓人さんが話してくれたわ。」

高本さんはふと、つぶやくように言った。

蓉子は驚いた。自分が神楽をやるなどということは初耳だった。

「いいえ、保存会を見学させて頂くだけです。昨年初めてお祭りに行つて神楽を観て、本当に感動したんです。それで偶然拓人さんに話かけて…。」

高本さんは膝のうえに丸くなって寝ている猫の毛並みをととのえながら言った。

「そうなのね、でもきつと、少しくらいはやってみたらいいわ。神楽はこの土地の人たちがずっと大切にしてきたものだから。そういえば、この民宿でも昔神楽が行われていたのよ。」

高本さんは漆塗りの古い物入れから巻物を出して見せてくれた。和紙に行書体で何やら文字が書かれている。

「享保元年 神楽上演記録…。」

この地域では、各家が持ち回りで神楽宿として民家に注連縄を張り、神楽の上演を行っていたそうだ。蓉子がこうして高本さんと話しているうちに、あっという間に日が暮れて、神楽の練習が始まる時間になった。

エンジン音が民家の前に止まった。蓉子は急いで荷物と手土産を持つと、拓人のトラックの助手席に飛び乗った。

「蓉子ちゃん、頑張ってね。楽しんできてね！」

高本さんは門のところまで出て手を振って見送ってくれた。蓉子は手を振りかえし、拓人は軽く会釈をした。

夜の田舎道は一寸先が見えないほど真っ暗で、遠く山の端に集落の明かりが点々と灯って、天球から小さな星が瞬いて無数に降りてきたようだった。

公民館に到着すると、ちょうど保存会の人たちが一人、また一人と集まって来ているところだった。みんなこの袖山の集落に生まれ育

ち、遠野市内で仕事をしているのだという。保存会のメンバーは十人ほどで、中には小さな子供を連れて家族で練習に参加している人もいた。公民館には板敷の神楽舞台があつて、奥には大きく袖山神楽保存会と書かれた幕が降ろされていた。

「これが神楽舞台なのね」

蓉子は言った。

「そう、舞台の四方には注連縄をかけて、奥には神楽の幕を下ろすんだ。幕は神楽の種類や保存会によって色々な絵柄や紋が描かれている。あの幕の後ろに舞手が控えていて、太鼓の打ち鳴らしが始まったらこの幕をくぐって舞台にでてくるんだ。」

拓人は答えた。

保存会の人たちは机を囲んで何やら話し込んでいたが、蓉子が声をかけると皆振り返って挨拶した。

「前に拓人が話していた蓉子さんね。東京からはるばる、遠野へようこそ。」

黒ぶちの眼鏡をかけた髪の短い女の人が蓉子の方を向いて言った。

「ありがとうございます。蓉子と申します。よろしく願ひします。」

蓉子は姿勢を正して手を身体の前で丁寧を重ねるとお辞儀をした。

「そんなにかしこまらなくていいのよ。さあさあ、座って。」

その女の人は蓉子の分の椅子をすつと用意してくれた。拓人が事前
に保存会の人たちに蓉子のことを紹介してくれていたらしい。

「蓉子さんは神楽に興味があるんでしょう。私たちにとつたら子供の
頃からずっと当たり前にあるものだけど、外から来た人にとつたらか
なり珍しいものみたいね。来てくれて嬉しいわ。」

保存会の人たちは蓉子に気さくに話かけ、輪の中に入れてくれた。

やがて、会長さんが到着するといよいよ練習が始まった。会長さん
は七十代の小柄な男性で、若い頃は舞の名手だったという。皆に明る
く挨拶をすると、神楽舞台の真正面に座布団を敷いて座った。

太鼓が打ち鳴らされると、「門打ち」の舞の練習が始まった。「門打
ち」とは、商店や民家の門の前で獅子舞や神楽が祈祷をしてまわるこ
とを言う。袖山神楽保存会の「門打ち」の踊りは太刀を用いて宙を切
るように踊られる。練習では、神楽舞台に三人ほどが上がり、子供も
そこに混ざって踊っていた。

保存会の人たちは各々刀のさばき方に個性があり、蓉子はそれが素

敵だと思った。そんな風に感心して見とれていると、拓人が来て蓉子の方へ太刀の柄を差し出して渡した。

「蓉子さんもやってみてけろ。」

拓人は言った。

蓉子が戸惑っていると、見かねた会長さんが蓉子に向かって微笑んで言った。

「せっかく遠野まで来たんだもの。少しぐらいやってみてもいいんでねえか。」

蓉子は、覚悟を決めて太刀の柄を受け取った。拓人は自分も刀を持つと、神楽舞台上に上がり、蓉子の前に立って丁寧に動きを教えてくださいました。

後ろに身を翻して下から上へ刀を突き上げて宙を斬る、次に、前に身を翻して刀を肩にかつぐ。

この動きを少し変えながら繰り返す。

動きが難しいだけでなく、腰を落として踊る神楽の舞は体力的にもかなりきつい。蓉子はあはあと息を切らしながら必死に拓人の動き

のあとに続いた。拓人は蓉子ができるようになるまで何度でも練習に付き合ってくれた。

「なかなかすじが良いなあ…。」

会長さんは蓉子の踊る姿を見て感心したように呟いた。

「門打ち」の練習が終わると、保存会の人たちが披露する演目の練習が始まった。先ほど蓉子に話しかけてくれた黒ぶち眼鏡の女の人は弓矢をつがえて舞う「八幡舞」を踊った。大地を力強く踏んで舞うこの舞は迫力があってとても格好良かった。

拓人は、彼の兄と鶏舞を舞った。鶏舞は「八幡舞」とは異なり派手な所作はないものの、足を少し後ろへおくる動きや扇をかざす動きが印象的で美しかった。

次の日も、また次の日も蓉子は休まず練習に参加した。そして、「門打ち」の舞をなんとか踊れるようになった。一度踊りを習得すると動きの軌道が身体に馴染むように感じられ、太刀の重さもそれほど気にならなくなった。

三日目の練習の最後に、会長さんが蓉子の方へきて声をかけた。

「蓉子さん、初めてで大変だろうけど鶏舞をやってみねえか？」

蓉子は驚いた。実は昨日、今度の祭りで鶏舞を踊る筈だった拓人の

兄が怪我をして舞台に出ることが難しくなったのだった。

「鶏舞」は、神楽殿や神楽舞台で上演が行われる際に、はじめに場を清める重要な舞だ。そのような舞が自分に務まるだろうか。蓉子は不安だった。しかし、そんな思いとは裏腹に元気よく答えていた。

「はい、やってみたいです！」

会長さんは頷いた。

「よし、そうしたら練習を始めよう。」

鶏舞は、古事記に登場するイザナミとイザナギを象徴した二人の舞手が円を描いて舞台上をめぐる舞だ。

日本では、鶏は明け方に鳴くことから、闇を払う神聖な鳥として信仰されてきた。

神楽の演目の中では派手なものではないけれども、両脚の膝をきっちりつけて踊ることや、腕を目線の高さより高く挙げてはいけないことなど様々な決まりがあり、品よく美しく踊るには訓練が必要な難しい舞だ。

蓉子は必死になって練習した。舞の中で、ゆっくりとしゃがんでは起き上がる動きが何度も繰り返され、前腿の筋肉をひどく疲労させた。十分ほどもある演目のあいだ中、ずっと腰を落として屈んだ姿勢

を保つことは至難の業だった。脚の運びだけでなく、演目の後半の扇の扱いもまた本当に難しかった。

蓉子が苦戦していると、そんな時は決まって拓人や保存会の人たちが隣に来て、

「扇はもう少し身体の近くでまわすと良いよ。」

「扇を返すタイミングを早くするとやりやすくなる。そう、良くなつた。」

などと声をかけながら教えてくれた。

練習が終わって宿に帰る頃には、蓉子の身体はくたくたになっていた。宿に帰って熱い湯船にさっと浸かると、布団に入って気を失ったように眠った。

そうしているうちに、とうとう祭りの当日になった。

今回蓉子が出るのは、遠野市内の郷土芸能団体が一同に会する「ふるさと遠野まつり」という祭りだ。この祭りは遠野市で行われる数々の祭りのうちで最も規模が大きいものだ。

蓉子は前日の晩になんとか鶏舞を習得したのだった。振りを覚えなければならぬ重圧から解放されたせいも、目が覚めると蓉子の身体

はすっきりとしていた。

窓から外を眺めると、宿の裏の栗林にはうっすらと小雨が降り、灰色の霧が山のおもてを這うようにかかっていた。昨晩はかなり雨が降ったようだ。風景は透きとおった陰影を湛え、黒い大地は冷たい雨に清められたようだった。

蓉子が宿の食堂へ向かうと、高本さんは暖かいご飯と具の多い豚汁を用意してくれていた。

「あいにくの雨ね。でも大丈夫よ。予報ではお昼頃から晴れることになっているから。今日は蓉子ちゃんの舞を観に行くわ。」

蓉子は手にぐっと小さく拳を握りしめた。

「ありがとうございます、頑張ります。」

明るく言ってみたものの、緊張で少し表情がひきつっているのが自分でも分かった。

高本さんはそれを見てふっと笑って言った。

「あんまり気負わなくて大丈夫よ。楽しむことが一番。とにかく、楽しんでね！」

蓉子は頷くと、豚汁をすすった。汁を啜ると、身体の内側から湯気が立ってほっと温かくなるような気がした。

蓉子が朝食を終えて部屋に戻ると、門の外にトラックが止まる音がした。

「高本さん、おはようございます。いよいよ今日ですね。」

拓人が声をはずませて挨拶をした。

「あら、拓人さん、おはよう。いつも蓉子ちゃんをありがとね。今日は私も久しぶりに祭りに行くわ。」

「高本さん、来てくださるのですね。嬉しいです、ありがとうございます。ます。」

拓人は軽くお辞儀をすると、玄関でしばらく話をしていた。蓉子は神楽に使う足袋や雪駄や扇の準備で忙しく、何を話しているのかよく聞こえなかったけれど、今日の神楽の演目や蓉子の出番の時間などについて事細かに話しているようだった。

支度が整うと、蓉子は拓人のトラックに乗り、霧のかかったホップ畑を横切って遠野の中心部にある市役所へ向かった。拓人はトラックを運転しながら、今日一日の流れについて口早に話し始めた。

「まず、市役所の控室で着物を着る。そして、午前中は町場をめぐって門打ちをするんだ。慣れない雪駄で長時間歩くのは疲れるから、休みみいこう。」

拓人は言った。

「それから、お昼過ぎに市役所前の芸能パレードに参加して、ここでも門打ちの刀の舞を披露する。毎年、観光に来た人たちですごい賑わいなんだ。そして最後に、夜の神楽共演会が市役所前の神楽舞台で開催される。ここで蓉子さんは鶏舞を踊るんだ。」

蓉子は頷いた。何だか、これから自分が思ってもみなかったようなことが起るようなきがして胸が高鳴った。

拓人は続けた。

「それにしても蓉子さんは努力家だなあ。保存会の人たちも感心していたよ。」

蓉子は拓人の横顔を見つめた。拓人や保存会の人たちにほんの少しでも認めてもらえたような気がして嬉しかった。

道の脇の川幅が徐々に広くなり、車が町場に入った。町場には屋台や神輿の準備が為され、沸騰する寸前の湯水のような騒々しさがあつた。

祭り当日の朝、保存会の人たちは市役所の控室に集まって着物の着付けを行う。会長さんは蓉子に桃色の花模様を着物と綺麗なうぐいす色の袴を貸してくれた。

「今日は一日長くなる。頑張ろうな。」

そう言って目の端にしわをつくってにかつと笑った。

「はい、頑張ります。よろしくお願いします。」

蓉子も一緒になって笑った。

保存会の人たちはみんな手慣れた手つきで自分の着付けを行なってゆく。

蓉子は保存会の二人の女性に着替えを手伝ってもらった。神楽の着付けは、着物を二枚着重ねてその上から襷をかけ、おもて側の一枚を脱ぐ「脱ぎだれ」という特別なものだ。

「蓉子さん、なかなか似合ってた。」

会長さんが言った。蓉子は少し顔を赤らめた。着物を着るのは身体が締め付けられる感じがして苦手だった。

拓人はきれいな白い着物を着て紺の袴を履いていた。

全員の着付けが済むと「門打ち」を行うために町場へ出る。先頭を歩く人が保存会の名前を書いた旗を掲げ、刀や太鼓を携えた人たちがその後に連なって歩く。

そして、古い民家や商店の前まで来ると、立ち止まって太鼓を打ち鳴らし、権現さまと呼ばれる獅子頭を掲げて祈祷の舞を行う。蓉子た

ちも刀を持って一緒になって舞を舞った。

「門打ち」が始まると商店の人たちは家から出てきて鑑賞し、祈祷のお礼に飲み物や飴をくれたり、御花と呼ばれる現金の入ったのし袋をわたしてくれたりした。

かつては、里に住んで町場で買い物をする人々が祭りの際に神楽の祈祷を行って御花を貰い、経済をまわしていたのだという。

蓉子はふと、遠い昔、まだ農業が機械化されていないような時代に袖山神楽保存会の旗を掲げて同じように「門打ち」にまわっていた人たちのことを想った。

蓉子たちは午前中のうちに市の中心部の数軒の民家や商店で「門打ち」を行い、昼食をとり市役所へ戻った。

「拓人さん、お疲れさま。」

蓉子は拓人に言った。拓人の言った通り、慣れない雪駄のせいで脚はくたくたになっていた。

「お疲れさま、蓉子さん。やっと昼食だね。いっぱい食べて午後に向けて力をつけてけろ。」

拓人は蓉子に拳ほどの大きさもある握り飯を渡してくれた。町場を歩いて神楽を舞って疲れた身体に大きな握り飯はご馳走だった。米は

一粒一粒がふっくらと炊けていて、真ん中には目が覚めるほど塩辛い梅干しが入っていた。蓉子は夢中になって頬張った。

昼食を終えると、蓉子たちは市役所の前の道を練り歩くパレードに参加した。パレードには遠野市内の様々な郷土芸能団体が参加していた。

太鼓を打ち鳴らし、紺や白の幕を翻して踊るしし踊りや、鮮やかな赤の着物を纏い日本髪を結った少女たちが踊る南部囃子など、町には色彩と音像が溢れ、何だか宝箱をひっくり返したような光景だった。

蓉子はこれほど様々な郷土芸能がこの土地に伝承されていることに驚くと同時に、日本に住む人たちが心の奥底で遠い昔から大切にしてきた心象風景のようなものがここに在るような気がして、ただぼんやりと見惚れてしまった。

真昼になると日はぎんぎん照りだして、風は灰色の雲をさっと払った。今朝降りやんだ雨に濡れた民家の屋根は、陽射しを浴びてまばゆく輝きだした。

パレードが始まると、蓉子たちは列になって「門打ち」の舞を舞い、拓人は列の後ろで笛を吹いた。竹でできた笛の音色は、澄んだ青空に晴れやかに昇った。

通りは色とりどりの造花や提灯で飾られ、観光客はみんな思い思いに写真を撮ったり、屋台の団子を食べながら神楽を鑑賞したりしている。

パレードが終わると、夜の神楽共演会の準備に取りかかった。この舞台でいよいよ蓉子は鶏舞を披露するのだ。

蓉子は、門打ちの衣装を脱いで黒い女物の着物を着付けてもらった。うしろみごろを合わせて襟をととのえ、腰紐をぎゅっと結ぶ。そして、着物の上から帯を巻く。帯を巻かれると、肺と肋骨がひとまわり縮まるような気がして少し呼吸が苦しかった。帯には錦糸で細かく萩の模様が織り込まれ、光にかざすときらきらと輝いて美しかった。頭には手拭いを巻き、その上から鶏の飾りのついた鳥兜をかぶって喉もとできつく紐を括って固定した。これできっと舞の途中に兜が脱げることは無いはずだ。

装束を着けると着けないのでは身体感覚が大きく変わる。蓉子は着物と兜に縛られてガチガチになりながら舞台の方へ向かった。拓人も蓉子と同じ鶏舞の装束をつけて、もう舞台袖に待機していた。

演目を紹介するアナウンスが始まると、蓉子たちは幕の後ろへ控え

た。

拓人は蓉子の肩をぼんと叩いた。

「大丈夫、これだけ練習をしてきた蓉子さんならきつと良い舞ができるはず。」

拓人が蓉子を見つめる目には、蓉子へのまっすぐな信頼がこもっていた。蓉子は頷いて、胸の奥が熱くなるのを感じた。蓉子もまた彼を見返した。

「よし、行こう。」

拓人が言うと、ちょうど太鼓の打ち鳴らしが始まった。

拓人ははじめに神楽の幕をくぐって舞台に出た。

拓人が舞台をひと廻りするのを見届けると、次に蓉子も幕をくぐって舞台に出た。二人は円になって廻りながら息を合わせて舞の所作をくり返した。

一度舞台に出してしまうと装束に身体を縛られる息苦しさはもう気にならなくなっていた。蓉子は夢中になって踊った。

足を踏み、着物を上手くさばき、扇を翻して舞っているうちに蓉子は今までお世話になった人たちへの感謝の気持ちが溢れてきた。

この舞を自分に教えてくれた会長さんや神楽保存会の人たちや、拓人さんや、民宿の高本さんや、神楽を昔から今まで伝えて守ってきてくれた顔も名も知らない人たちや：

会場からは声援が飛んできた。それは、一生懸命に舞う蓉子たちを応援する声だった。

この身体に神楽というひとつの芸能を預からせてもらった。

自分は遠野の外から来た人間だけれども、芸能を預かる命の連なり
のひと鎖としてこの舞を舞わせてもらっている。だから、一生懸命に
神楽を舞いたい。

そして、これからもこの土地で芸能を預かり、守ってゆきたいと蓉子はこの時強く思ったのだった。

本番の舞台が終わると、会長さんが迎えてくれた。保存会の人たちも宿の高本さんも後から来て蓉子を笑顔で迎えてくれた。無事に舞い終わってほっとしたせいか一気に涙が溢れてきた。

拓人は蓉子の方へ来ると、爽やかに笑って汗をぬぐいながら言っ

た。

「さすが蓉子さんだね。でも何だか最初からこうなるような気がしていたんだ。」

蓉子は彼との約束を果たせたような気がして嬉しかった。

皆が行ってしまうと、拓人は蓉子に言った。

「明日の朝、高清水高原に行こう。蓉子さんに渡したいものがあるんだ。」

蓉子は頷いた。

次の日の早朝、拓人は蓉子を迎えに来た。蓉子は宿の部屋から出ると、彼の軽トラックの助手席に座った。窓から見える杉の林は青くしんと立って、かすかに霧のかかる草むらに小さな鈴をゆするような声で虫が鳴いていた。トラックはくねくねと曲がる細い山道を登った。

頂上まで来ると。その日は雲海が出ていた。雲海の上には、声を投げるとどこまでもまっすぐに響いてゆくような青い空が広がっていた。

拓人と蓉子がトラックから降りると、道の向こうに黒い大きな影がざわざわと音を立てて草むらにもぐった。

蓉子は一瞬どきりとして、身を固くして拓人の方を見た。

拓人は朗らかに笑って言った。

「あれはカモシカだよ。この場所は普段は野生の動物たちの場所なんだ。大丈夫、彼らは人を襲うことはないから。」

緊張の糸が解けて、蓉子はふうとため息をついた。

日が昇るとともに雲海がとぎれて、眼下に遠野盆地がひらけた。川が分かれて中央を横切り、黄金色の水田がモザイク模様を散りばめたように広がっている。

「わあ、きれい。」

蓉子は思わず声を上げた。それは、美しい山々に囲まれ、守られるように横たう盆地だった。拓人は側に立って黙ってその明けてゆく光景を眺めていた。風が吹くと草はさらさらと鳴り、高原のすすきは銀の流れのようになって波立っていた。

拓人がふと口を開いた。

「昨日の神楽は本当に良かった。感動した。」

「蓉子さんの踊りが良かったから、あんなにも応援する声が客席から湧いたんだ。」

蓉子は言った。

「まさかこんなことになるなんて、一年前には全く想像していなかったわ。」

「でも、今こうして神楽を踊ることができてとても嬉しい。拓人さんのおかげよ。本当にありがとう。」

拓人は、ふっと微笑んだ。

そして、手に持っていた紫の風呂敷を開くと、中から袖山神楽保存会の法被を出して蓉子に渡した。

「受け取ってける、蓉子さんはもう立派な袖山神楽保存会の一員だ。」

「これを大事に持って、またいつでも神楽の練習に来てける。また一緒に舞台に立とう。」

蓉子はもう嬉しいのだからおそれ多いのだから、何だか様々な思いが込み上げて涙が出そうになった。

蓉子が頷いてそれを受け取ると、拓人はまたにっこりと微笑んだ。

笑った拓人の瞳は、朝の澄んだ美しい光を湛えていた。